

令和3年度 前期学位記授与式 式辞



本日、学部を卒業し学士の学位を得た13名の皆さん、大学院博士後期課程を修了し博士の学位を得た3名の皆さん、学位取得おめでとうございます。本日、皆さんを卒業生、修了生として送り出せることを列席しております理事・副学長、学部長そして本学教職員とともに心よりお祝い申し上げます。

昨年から続く、新型コロナウイルス感染症の蔓延は、皆さんの学業にも大きな影響を与えました。大学の講義がオンライン中心となり、図書館や大学設備の利用制限など、学業の総仕上げをすべき皆さんにとって、足枷となってしまったと考えます。本学から新型コロナウイルス感染症のクラスターを発生させないための措置でしたが、皆さんにとっては辛い状況であったと考えます。その辛い状況を乗り越えて、本日皆さんが卒業そして修了されることに私も我がことのように喜びを感じています。

現在、新型コロナウイルス感染症の感染を防止するために、大流行以前の行動様式を改め、罹患する危険性の少ない生活・行動様式が求められています。「ニューノーマル」あるいは「新しい日常」という言葉で総称されているこのような生活・行動様式の変化は、すでにある程度、社会に浸透しました。感染症が、人と人との接触により広がることを考えると、自分を守り、他の人を守るためにも、「ニューノーマル」を生活の規範に添えることが大切です。さて、「ニューノーマル」という言葉は、もともと、2000年台の初頭にITの急速な進展により、社会が質的に変化したことを認識し、それ以前の社会には戻れないと考えよとの警鐘として発せられた言葉でした。今回の新型コロナウイルス感染症やこれまでになかった技術的な進展は、社会の仕組みの根本や人々の規範意識を変え、社会に不可逆な質的变化をもたらします。このような変革「パラダイムシフト」に対応することが、「ニューノーマル」であると考えていいでしょう。今回我々が直面している新型コロナウイルス感染症では、人と人との接触の方法が感染と関連し、密閉、密集、密接のいわゆる「三つの密」を避

けることが求められました。直接会っての会話が重視されてきたこれまでの対人関係に「パラダイムシフト」が生じ、「ニューノーマル」としてのリモートワークや遠隔授業の導入がありました。歴史を紐解けば、世界はこれまでに幾度となくパンデミックや技術的な変化に見舞われてきました。14世紀のヨーロッパでは、ペストの大流行により、それまでのキリスト教の権威が失墜しました。このパラダイムシフトに対応するニューノーマルの中から、自然科学が発達し、現在の産業の基礎が築かれていったことはよく知られるところです。今、我々が直面している新型コロナウイルス感染症のパンデミックが惹起するパラダイムシフトに対応するニューノーマルが、どのような社会の変化をもたらすのか、我々はその当事者ではありますが、長く広い視野で観ていく必要があります。

我々の社会は、さまざまな要因により、日々変化を重ねています。パンデミックやIT革命のような劇的な変化だけでなく、小さくても確かな変化が我々の社会を変化させています。そのような変化が現在の社会を激動させるうねりになっていることは明らかです。社会の変化は、我々にリスクとチャンスをもたらします。変化をリスクと捉え、現状を維持しようとするれば、変化に抗うことが必要となり、その行動が優先されます。一方、変化をチャンスと捉えて、新しい社会のあり方に自らの考え方を適応させていくことができれば、変化の中で新しい価値観を見出す余裕を持つことができるでしょう。変化の中でチャンスを掴む力が、激動の時代に要請される「ニューノーマル」を創り出す力ではないかと考えます。和歌山大学は、教育学部、経済学部、システム工学部、観光学部の四つの学部が一つのキャンパスに集まるコンパクトな大学ではありますが、ここでの学びは融合的であり、社会の変化に合わせたものとなっています。本日、本学を卒業する皆さんが、これまでの和歌山大学での学修の成果を大いに活用して、社会を先導する「ニューノーマル」を創っていかれることを期待しています。

令和三年九月二十四日
和歌山大学 第十七代学長 伊東 千尋

